



実践1

群読で表現しよう

使用教材「扇的」(二年)

お茶の水女子大学附属中学校 教諭
宗我部義則

1 はじめに

本校では、一年生で谷川俊太郎さんの詩「朝のリレー」の群読台本をつくって読んだり、『平家物語』の「坂落」の場面をクラス全員で群読したりしています。そのため、「扇的」では、十人程度のグループで群読をさせることにしました。少人数での群読は、お互いの発表を聞き合えるのがよいところです。仲間たちの声の表現を聞くことで、自分たちの表現を振り返ったり工夫しようしたり、学び合いが生まれるからです。また、与一役やナレーター役をより多くの生徒に割り当てることができると、少人数で行う群読のよい点です。

2 指導計画(全五時間)

目標

▼「扇的」の文章を読んで、場面の様子や状況、登場人物たちの心情を想像する。
▼今と違う中世の武士ならではのところを

考えたり、心情など今の自分たちに通じるところを考えたりして読む。

▼発表のしかたを工夫し、全員で協力して発表を行う。

第一時 内容を大まかにつかむ

- ・全員で音読する。
- ・グループ分けをする。

第二時 群読台本をつくる

- ・どんな役を立てるか、原文を読み込んで決める。
- ・配役を決める。

第三・四時 読み方を考え、練習をする

- ・場面の様子や登場人物の心情を話し合い、読み方を工夫する。
- ・練習をして練り上げる。

第五時 発表

- ・グループごとに発表をする。
- ・他のグループが工夫している点などに注意しながら聞く。
- ・教師の講評

いので、対句になっているところは分けて読むなど、群読の表現がより豊かになるような助言をしていきます。

そして「読み担い」についても考えさせます。声質も考慮しながら担当を決めるよう指導します。生徒たちは「扇は優雅に舞うから女子の声がいい」などと話し合います。また、単純に一人ずつ読みを担当するのではなく、群読では「声を重ねる部分」をつくったほうがよいことを告げ、声を重ねる必然性のあるところを考えさせるようにします。そのときも「この場面を映像化したときに何が印象的に映し出されるだろう」と、映像のイメージを想起させるとよいでしょう。すると生徒から「鎧矢が扇に当たる瞬間は、扇と鎧矢がクローズアップして映し出されるから、扇と鎧矢の役がいっしょに読むようにしよう」などのアイデアが出てくるようになります。

群読台本は、教師があらかじめプランを考えておくことが大事ですが、基本的に生徒たちから出てきた意見をもとに分担を決め、台本づくりをさせるとよいと思います。

■読み方を考え、練習をする(第三・四時)
『平家物語』は武家物語らしい読み方をさせることが大事です。教師が「ころは二

月……」と時代劇のような重々しい読み方を披露してみせるとよいと思います。

「扇的」では、与一役の読みを磨くと、それに引き上げられるように群の読み全体がレベルアップします。ですから、与一の「南無八幡大菩薩……」という長いせりふをどのように読むかが鍵になります。生徒たちには、この部分の与一の心情を話し合わせ、どう工夫して読めばいいか考えさせます。

また、最後の「あ、射たり。」と「情けなし。」の読みも工夫しがいのあるところでは。教師は「こう読みなさい」ではなく「ここを工夫してごらん」と、「工夫のしどころ」を教えるようにします。どのように読むかは生徒自身に考えさせるのです。

■発表(第五時)

発表の前に「私たちのグループは」という点を工夫しました」と、自分たちの群読の工夫を説明させます。そうすることで、聞き手はそこに気をつけながら発表を聞くようになり、感想を述べるときも「間の取り方を工夫したと言っていて、たしかに工夫されていました、もう少し長めに間を取ったほうがより効果的だと思います」などと、具体的に話せるようになります。

3 指導の実際

■群読台本をつくる(第二時)

生徒たちには原文を掲載したプリントを配布し、それに書き込んで台本づくりをさせます。群読では「読み分かち」(どんな役がどこを読むか)と「読み担い」(誰がどう読むか)を工夫することが大事です。どう工夫するかを考える過程で、生徒たちがそれぞれの教材解釈を自由に出し合い、他の読みに触れて自分の読みを深めることができるからです。

まず、「読み分かち」についてグループごとに話し合わせます。生徒たちは、与一、源氏軍、平家軍、ナレーターという役を挙げてくるでしょう。それ以上思いつかないようだったら、教師が「他にも『何がどうなった』という視点で役を考えてごらん」。「この場面を映像化するとしたら、何がクローズアップされるだろう」などと投げかけると、扇、鎧矢、風、舟などの役が挙がります。さらに「扇的」は対句表現が多

4 おわりに

群読は練習が進んでいくと、個々の読みが影響し合い、響き合ってお互いの高め合いが生まれていきます。群読を取り入れることの、その発表に向けて力を合わせることのよさを実感する瞬間です。

『平家物語』は、重厚で躍動感にあふれ、読んでいて気持ちのよい文体です。群読の楽しみを存分に味わうことができる古典だと思っています。

